

① 昔、男ありけり。
が い たそうだ

② その男、身をえうなきもの
は 我が 何の役にも立たない と思ひなして、京にはあらい、
に 思い込ん

東の方に住むべき国求めにとて行きけり。
国 のによい を 行こう思つ 行つ たそうだ

③ もとより友とす人、ひとりふたりして行きけり。
以前から している と共に 行つ たそうだ

④ 道知れる人もなくて、惑ひ行きけり。
を 知つ ている 迷いながら行つ たそうだ

⑤ 三河の国八橋といふ所に至りぬ。
いう 到着し た

⑥ そこを八橋といひけるは、水行く河の蜘蛛手なれば、
呼ん た の が ののように分かれた形 足である ので

橋を八つ渡せるによりてなむ、八橋といひける。
八本 渡し た こと ちなん で 言つ たそうだ

⑦ その沢のほとりの木の陰に下りゐて、乾飯食ひけり。
馬から 座つ を 食べ た

⑧ その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。
が とても 美しく 咲い ている

⑨ それを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句の上に
が 言うことには いう

据ゑて、旅の心をよめ。」と言ひければ、よめる。
置い 詠んでみなさい 言つ た ので 男が 詠ん だ 歌

⑩ 唐衣きつつなれにしつましあればはるきぬる旅をしぞ思ふ

⑪ とよめりければ、みな人、乾飯の上に涙落として、
詠ん だ ので 一行の は を

乾飯はその涙で水分を含んだので
ふやけてしまつ た ほとびにけり。

⑫ 行き 行きて、駿河の国に至りぬ。
どんだん 進んで 行つ 到着し た

⑬ 宇津の山に至りて、わが 入らむ とする道は、いと 暗く 細きに、
到着し 自分たち 入る う とても 暗く 細い 上

薦・楓は茂り、もの心細く、すすろなる めを見ることと思ふ に、
なんとなく 思いがけなく辛い 目 思っている と

修行者 会ひたり。
が男たち一向に 出くわした

⑭ 「かかる道は、いかで かいまする 。」と言ふを見れば、
このような 寂しい を どうして いらつしやるのです か 言う 人 見る と

見 京で 見知つ た であつた なあ けり。
し人なり

⑮ 京に、その 人の 御もとにとて、文 書きて つく。
都 誰それという 私が恋しく思う 手元 いうこと 手紙 を つけた

⑯ 駿河なる宇津の山べの うつつにも夢にも人にあはぬなりけり
の国に ある 山辺 「うつ」という名のように 現実 だというの が とても 白く 降つ ていた 会わ なかつ た なあ

⑰ 富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪 いと 白う 降れり。
見る と 末 だというの が とても 白く 降つ ていた

⑱ 時知らぬ山は富士の嶺いつとてか
を ない この 山 だ いったい今を 思つ

鹿の子まだらに雪の 降る らむ
が 降つ ているのだらう か

⑲ その山は、ここにたとへ ば、比叡の山を二十ばかり重ね上げ
富士 例えた とすると

たらむほどして、なりは塩尻のやうになむ ありける。
た ような ぐらい で 形 だ よう で あつ たそう だ

⑳ なほ 行き 行きて、武蔵の国と下つ総の国との中に、
どんだん 進んで 行つ 間

いと 大きな 河あり。それをすみだ河といふ。
とても 大きな 河 あり。 隅田川 いう

一行の者たちが
集まつて座つ
旅に出てからのことや都のことに
思ひをはせる
・その河のほとりに群れるて、思ひやれば、

途方もなく
限りなく遠くも来にけるかなとわび合へるに、

・渡し守、「はやが早く舟に乘れ。日も暮れぬ。」と言ふに、

・乗舟にりて渡らむとするに、河をみな人々はものわびしくて、

京都恋しくに思ふ人なきにしもあらず。
京思ふに思ふ人なきにしもあらず。

・さる折しも、白き鳥の嘴と脚と赤き、鳴の大ききなる、
ちようどその時折しも、白き鳥の嘴と脚と赤き、鳴の大ききなる、
鳥が

水の上に遊びつつ、魚を食ふ。
でながら食っている

・京京都には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず。
京都には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず。
はその鳥を

・渡し守に問ひければ、「これなむ都鳥。」と言ふを聞きて、
問うたところ
だよ

・名「都」という語をにし負はばいざこと問はむ都鳥
よ

私わがが思ふ人はありやなしやと
恋しく思うのですか、いないのですか

・とよめりければ、舟こぞりて泣きにけり。
詠んだので、舟こぞりて泣いてしまったそうだから。